

【研究報告】

「五木寛之研究」－作品「朱鷺の墓」・「蓮如 - われ深き淵より - 」を通して－
～ 黒い記憶 を辿って、初期作品群から『運命の足音』への軌跡～

(1) 研究動機 なぜ郷土に関わる作家を選んだのか

今この石川の金沢の学校で、生徒たちの自己形成に携わる者の一人として、彼らのアイデンティティーの確立や自己理解のために、もっと郷土に関わる文学に慣れ親しむ機会を与えてあげべきではとの思いが常よりあった。今回研究テーマを考えるに当たっても、こうした思いが根底にあったように思う。自分が何者かということが見えにくくなっている現代にこそ、又さらには広く国際人として生きて行くに当たり、異文化の人間を深く理解するための前提としても、自分が生まれもしくは育ち、あるいは現在住んでいるこの土地やそこに生まれた文化を知ることが、これまで以上に重要になるとの思いがあった。

大学の頃は室生犀星の作品を取り上げた。それは言うなれば、内からの目を通してこの金沢を見るものであったが、今回はまた違った角度から金沢を捉えている作家の作品を見てみようと思った。そうすることによって、より金沢という町を複眼的に見ることができると思ったのである。

(2) 概要

平成14年五木寛之は、戦時中の母の死にまつわる自己の告白を記した『運命の足音』を出版する。そのあとがきに彼は、私は悪人である と述べ、さらに 自分はいつかこれを書こうと 40年間作家を続けてきました と語っている。そこでそれらの言葉をきっかけにして、『運命の足音』に至るまでの作品には実は、彼がこの本を執筆し母の死に向き合うために、解決せねばならなかった課題「母の死の意味を自覚し、母亡き後どのような形で許しを得るか」が提示され、加えてその課題に対する答や解決方法、そこに至るまでの経緯及び問題点が語られていたのだと気がついた。

五木は少年期に、外地で敗戦を迎え内地へ引き揚げる間、国家の責任を個人が負わされるという現実と直面した。一方彼は戦争という極限状態において、生きるため他者を犠牲にしなければならないという、人間存在の根源的問題をも突き付けられた。前者は、「国家と個人」の問題として形を変えながらも、作品の中で提示され続けた。そして後者の問題は、実は五木にとっての母の死の意味につながるものであり、黒い記憶 としてこれも初期作品から表れ、「海を見ていたジョニー」、「私刑の夏」、「恋歌」、「風の柩」などの各作品の中で、前述の解決せねばならない課題に関して、多角的に問われていた。そうした初期の頃の作品の一つ「青春の門 筑豊篇」とは、その 黒い記憶 から逃れるべく「内地に育った場合のもう1人の自分」を想定して描かれたものであるが、それとは対照的な、「自分のあるべき姿」を主人公に重ねた「朱鷺の墓」の中では、人間存在への洞察が深められ、母から許されるための論理が見出されていた。しかし母亡き後、その母から許されることは自分の論理では不可能であるとの問題点も、この作品はその反面において映し出していた。そしてこのように解決の糸口が見つからぬまま 黒い記憶 は五木の中に沈潜化し、第一回休筆期を迎えるに至る。その後 黒い記憶 はさらに彼を圧して、「人を犠牲にして生き残った自分が、流行作家でよいのか」という作家生命を脅かす問となり、2度目の休筆に追い込んで行く。だが休筆期、蓮如に傾倒した五木は、人間としての罪を受け入れ、母に代る人間を越えた大きな存在、母なる 大悲 に救われることにより、自分の

作家としての使命を自覚し、新たな執筆態度及び「国家と個人」の問題にも答を出すのである。そしてそのことが「蓮如 われ深き淵より」という作品から見出された。

以上述べてきた流れを作品を通して論証した。

(3) 活用について

今回の研究を通し、五木寛之の作品、及びその人となりや人生が見えてきたように思うが、まだまだ研究はこれからだと思っている。

また今年度授業においては、今回の研究対象として五木寛之を選んだ、その決め手となった彼の金沢に関するエッセイを生徒に読んでもらった。そしてそれを受けて、金沢など彼らが住む町についていろいろな角度から眺めた文を書いて、自分達の住む町に対する思いや見方を再認識してもらった。今後も生徒達が石川に関する郷土の文学作品や作家に触れる機会を作って行きたいと思う。

【講義などの研修の成果の活用】

今回2年間にわたる研修を通して、自分の授業や目の前の子供一人一人にどう向き合うかについて、今までとは違った角度から客観的に考え直すきっかけを得ることができたように思う。さらには、現代の子供達は今どういう状況にあるのか、そして何が必要なのかということも、戦後の日本の歩みという大きな流れから考えられるようになった。

いわゆる母子カプセルと言われる、母親以外の他の大人が介在しない育児や、地域のつながりの希薄化といったさまざまな問題を抱える環境の中で育った子供達は今、狭い集団内部において、緊張した人間関係を作っているように思われる。そうした中で現代の子供達に必要なこととして、様々な視点や個性的な見方に触れる必要性を強く感じた。それ故、家庭や地域、学校が連携しながら、それぞれの立場から子供達に接する機会を作るべきではないかと思われる。そうすることによって、子供達が自分とは考えの異なる集団の中に入っても精神的に耐えられるタフな精神力や柔軟性が養われることと思う。さらにはこれから益グローバル化する社会の中、異なる文化や価値観を持つ人々との交流の機会が増える際にも、このことは一層重要な課題であると思う。学校についても元々が、様々な考えや価値観を持つ子供達や大人の、出会いの場所であらねばならないと思われる。そこで今年度研修2年目に当たり、所属していた図書課の読書会に地域の方々に参加していただいた。さらに授業においても、経験や知識の豊かな大人の方に生徒達の話し合いに参加していただいた。

またこれからの社会や企業においては、今まで以上にコミュニケーション能力が求められると思う。それ故情報を賢く判断し、それに基づいて論理的に考え、かつ相手に納得してもらえる説明ができる力や、「気楽な雰囲気、しかし真剣な話し合い」ができる力が要求されると考えられる。そこで授業においては論理的な読解をしてもらうように今まで以上に心掛けた。又問題に対しては、「問題分析・それに基づく調査・仮説・検証」によって筋道を立てて考える場を何回か設け、それに基づいて各々の考えをグループ毎に話し合ってもらった。さらにその話し合いに際しては、いかに話がしやすくなるか色々と方法を工夫してみた。(こうしたコミュニケーションの意義やその能力の必要性を感じるようになったのは、大学院のそれぞれの講義で、異校種の人たちの話し合いによって問題の本質が探られ、充実した気持ちを幾度も味わったからである。)

ところで大学院で受けた講義の中の一つである「生涯学習特論」においては、学校教育のみで教育が終わってはならないことを痛感した。それ故社会に出ても自ら学び取って行く力を、いかに付けてあげられるかが重要であると思われた。前述のコミュニケーションのための力も、こうした自ら学び取って行く際に役立つ力だと思う。

一方心の悩みを抱える子供達に対しては、当然のことではあるが、一人一人に向き合いその子の行動の奥に隠されたものに歩み寄ろうとする姿勢の重要性を再認識した。その際に青年期という時期を、乳児期から始まり老年期に至るまでの長い人生の中の一時期として、又この時期特有な面から捉えることも大切と考えるようになった。

これまで生徒達と向き合ってきた経験は多少なりともあるが、その経験をベースにしながらも、様々な方法や理論も柔軟に取り入れて行きたいと思う。